

「銀河鉄道の夜」 ジョバンニとその家族

—— 改稿がもたらしたジョバンニのよりどころ ——

田 嶋 彩 香

はじめに

宮沢賢治は、三七年という短い生涯の中で、唯一の童話集『注文の多い料理店』をはじめ、地方新聞や同人誌等に発表した作品やその他を合わせ、百編を超える童話作品を世に残した。中でも「銀河鉄道の夜」は、賢治の代表作のひとつとされ、今もなお、世代を越えて多くの人々に愛され、読み継がれている。文学研究の世界でも、「銀河鉄道の夜」に対する注目度は高く、この作品を作者自身の宗教的な理想によって生み出された物語と捉える指摘や、ジョバンニや作者の成長物語として捉える指摘、他の賢治作品との比較研究、ジョバンニやカムパネルラのモデルとなった人物や、作品のモチーフになった話題に関する題材研究、

異稿研究等、多くの論者によって、さまざまな視点からアプローチされている。

「銀河鉄道の夜」(第四次稿)には、いくつかの家族が登場する。主人公のジョバンニの家は、父親、母親、姉、ジョバンニの四人家族。ジョバンニと共に旅をするカムパネルラの家は、父親、母親、カムパネルラの三人家族。また、リンゴの香りと共に登場するかおるとただしの家は、父親、姉、かおる、ただしの四人家族。家族構成がはっきりと語られているのは、この三つの家庭である。改稿の過程で、ジョバンニ家とかおる家の家族構成が幾度か変更されている事や、ジョバンニの母親やカムパネルラの父親が舞台に登場する事などからも、作者はこの作品に登場させる家族、あるいは家庭というものに対し、何等かのこだわりを持つ

ていたようである。

ジョバンニの父親は、第一次稿から第四次稿まですべて不在として作中には登場しない。私たち読者に、不在の理由は明確に示されていないが、いずれも働きに出ている為に家にはいないという理由は伝えられている。それに対しジョバンニの母親は、存在するもの、つまり、ジョバンニと共に家にいるものとして描かれ、第四次稿になると実際に作中に姿をあらわす。この《父親の不在、母親の存在》という設定は、第一次稿から第四次稿まで、変わらずに引き継がれている。しかし、改稿に伴う変化がまったくないわけではない。改稿されるごとに少しずつではあるが、変化をみせている。このことは、すでに多くの論者によって指摘がなされているし、改稿の過程を追ってみれば、多くの読者が気づく事であろう。

改稿に伴うこの変化について、単にジョバンニの父親と母親の描写が変更されたという事実の提示や、ジョバンニの心の変化や成長と結びつけた論はあっても、これらの問題と家族のあり方の問題を絡めて考察した論はあまりないように思う。^{*1}そこで、一つの試みとして、先行研究から学びつつ、改稿に伴うジョバンニの心の変化、そして作品全体の変化を、ジョバンニの父親・母親・姉たち家族と結びつけながら考察していきたいと思う。

一、ジョバンニの父親と母親

― 改稿に伴う描かれ方の変化とその効果 ―

a ジョバンニの父親

ジョバンニの父親は、改稿前も改稿後も家には不在とされている。その姿は、必ずしも明瞭な描かれ方はされていない。父親の様相を想像させる説明は、改稿されることに減少し、同時に抽象化され、その存在感も薄められていく。顕著なのは、次の場面である。

（あ、あの大きなバシフィックの海をよこぎらうとして、この人たちは波に沈んだのだ。そして私のお父さんは、その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかって、僕に厚い上着を着せやうとしたのだ。それを心配しながらおつかさんはあの小さな丘の家で牛乳を待つてゐらっしゃる。僕は帰らなけあいけない。けれどもどうしてここから帰れやう、いったい家はどっちだろう。）

第二次稿「銀河鉄道の夜」

（あ、その大きな海はバシフィックといふのではな

かったらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかって、たれかゝ一生けんめいはたらいてゐる。ぼくはそのひとにほんたうに気の毒でそしてすまないやうな気がする。ぼくはそのひとのさいはひのためにいったいどうしたらいいのだ〔ら〕う。〕ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまひました。

第三次稿および第四次稿「銀河鉄道の夜」

第二次稿では、自分の父親が、〈氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乘〕り、辛い状況の中でも〈僕に厚い上着を着せやうと〕必死に働いている事が、ジョバンニの心の声によつて伝えられている。しかし、第三次稿および第四次稿になると、ジョバンニの心の声によつて伝えられる〈氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って〕働いている人は、ジョバンニの父親ではなく、〈たれか〕に変わり、ジョバンニの父親を想像させる説明ではなくなるのである。

銀河の旅の途中、ジョバンニは沈没事故により命を落としたという姉弟とその家庭教師の青年に出会う。りんごの香りと共に乗車してきた彼らは、ジョバンニ達の傍に腰を下ろし、青年は、自分達がどのような経緯でこの列車に乗っ

たのかを語りはじめ。ジョバンニは、青年の話を聞きながら、ふと大きな海で懸命に働く人たちのことを思い浮かべる。

第二次稿では〈私のお父さん〕という言葉が出てきて、ジョバンニは自身の父親と思われる人物を想起し、過酷な状況の中で懸命に働く父親を思い胸を痛める。それに重ねて、自身の母親に対する思いも募らせる。しかし、改稿によつてこの場面から父親を想起させる表現は削除され、ジョバンニの心の声は、限定された狭い範囲の人々に対する直接の思いではなく、〈たれか〕という、より一般化された広い範囲の人々に向けられた思いになっていく。また、父親の想起がなくなると共に、ここでの母親の想起もなくなっている。

さらに、第二次稿では、青年の話を契機に、ジョバンニの心の声によつて明らかにされていた父親の所在は、第三次稿では、次のような形で明らかにされる。

「ザネリ、どこへ行つたの。」ジョバンニがまださう云つてしまはないうちに、「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。／ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るやうに思ひ

ました。／なぜならジョバンニのお父さんは、そんならっこや海豹をとる、それも密漁船に乗ってゐて、それになにかひとを怪〔我〕させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入つてゐるといふのでした。ですから今夜だつて、みんなが町の広場にあつまつて、一緒に星めぐりの歌をうたつたり、川へ青い鳥瓜のあかしを流したりする、たのしいケンタウル祭の晩なのに、ジョバンニはぼろぼろのふだん着のままで、病氣のおつかさんの牛乳の配られて来ないのをとり、下の町はづれまで行くのでした。／（ザネリは、どうしてもぼくがなんにもしないのに、あんなことを云ふのだらう。ぼくのお父さんは、わるくて監獄にはいつてゐるのではない。わるいことなど、お父さんがする筈はないんだ。（中略）それにザネリやなんかあんまりだ。けれどもあんなことをいふのはばかだからだ。）

第三次稿「銀河鉄道の夜」

ザネリから（らっこの上着が来るよ）と言われたジョバンニは、ひどく胸を痛める。ジョバンニの父親は、密漁船に乗つてラッコや海豹を捕る仕事をし、何らかの事情で監獄に入れられているという噂をベースにして読者に示されていく。ジョバンニは、父親が不在である為に、みんなが

楽しい祭りの晩を過ごす中も、誰とも遊ばず（ぼろぼろのふだん着のまま）でアルバイトをし、病床の母親の世話をしなければならなかった。そんな自分を思うと余計に（ぼつと胸がつめたくな）り、悲しく惨めな気分になつてしまふのだ。

ジョバンニは、（ザネリは、どうしてもぼくがなんにもしないのに、あんなことを云ふのだらう。ぼくのお父さんは、わるくて監獄にはいつてゐるのではない。わるいことなど、お父さんがする筈はないんだ）と、心の中で自分に言い聞かせるような言葉を巡らせる。子供にとつて、自分の親を侮辱されることは、何よりも嫌なことである。ザネリが、たびたびジョバンニに投げつける（らっこの上着が来るよ）という言葉には、ジョバンニの父親が（遠くさびしい海峡の町の監獄）に入れられている為、中々家に帰つて来られないのだと愚弄し、身体を壊した母親の面倒を見ながら家計の足しにアルバイトをするジョバンニの貧しさを蔑み、嘲弄する意が込められている。何の音沙汰も無い父親の身を案じ、潔白を信じ、帰りを待つことしかできない貧しい家の子どもジョバンニは、ザネリたちの格好のからかいの対象であつた。^{*2}

ジョバンニの父親が、監獄に入つてゐるという情報は、あくまでも噂であり、嘘か真か信憑性に欠ける話である。

第三次稿のジョバンニは、〈ぼくのお父さんは、わるくて監獄にはひつてゐるのではない。わるいことなど、お父さんがする筈はない〉と、父親が悪い事をしたという事実に対する否定をしている。しかし、ここでの表現は、監獄へ入っている事自体に対する否定にはなっていないと感じられる。その為か、吉本氏は、父親の所在について「作者はそのうわさに近いかたちでジョバンニの父を設定していた^{*3}」と述べている。第三次稿において、ジョバンニの父親の所在は、何らかの事件や事故等に巻き込まれた為、監獄に入っているという「うわさに近いかたち」で描かれ、人物像については〈鮭の皮でこさへた大きな靴だの、となかいの角だの〉をおみやげとしてジョバンニに持ち帰り、ジョバンニを跳ね上げらせるほど喜ばせるそんな優しい父親であることが、ジョバンニの心の声によつて語られる。

このように描かれていたジョバンニの父親だが、第四次稿になると、またさらに少し変化を見せることになる。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまださう云つてしまはないうちに、／「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。／ジョバンニは、ばつと胸がつめたくなり、そこから中きいんと鳴るや

うに思ひました。／「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向ふのひばの植つた家の中へはいつてゐました。／「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう。走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」

第四次稿「銀河鉄道の夜」

改稿後、父親に対するジョバンニの心の声と、父親の所在を伝える語りは、すべて削除された。第三次稿のジョバンニは、〈ザネリは、どうしてぼくがなんにもしないのに、あんなことを云ふのだらう〉〈あんなことを云ふのはザネリがばかなからだ〉と、相手に向かつて示す言葉ではなく、ただ心の中で悶々とする事しかできなかったが、第四次稿のジョバンニは、ザネリの嘲りを受けた後、〈何だい。ザネリ〉と、高く叫び返し、おまけに〈走るときはまるで鼠のやうなくせに〉と、ザネリを批判する心の声をはつきりと持つことも出来るようになっていた。心の声という自分だけの誰にも聞こえる事のない無声から、批判を含んだ有声へ。第四次稿のジョバンニは、自分の声で叫び返す力を手に入れたのだ。

第三次稿にあった父親の所在を伝える記述は、第四次稿では位置を「家」の章に移して、次のように変えられて、読者に伝えられる事になる。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰ってくると思ふよ。」／「あ、あたしもさう思ふ。けれどもおまへはどうしてさう思ふの。」／「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」／「あ、ただどねえ、お父さんは漁へ出てゐないかもしれない。」／「きつと出てゐるよ。お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持つて行くよ。」

三、家 第四次稿「銀河鉄道の夜」

第三次稿では、語りとジョバンニの心の声によつて明らかにされた父親の所在は、改稿後、会話という形をとつてジョバンニの口から明らかにされる。改稿前、ザネリのひやかしや、青年の話など、ジョバンニが父親について語る場面には、直前に父親を彷彿させるような話題が用意され

ていて、それらを糸口に、ジョバンニは心の中で父親を思い出していた。しかし、改稿後、ジョバンニが父親について語る場面に、父親を彷彿させる話題は用意されていない。改稿後のジョバンニは、周囲や目の前にいる会話の相手に向かって自ら進んで父親の話題にふれはじめるのだ。

自分の憂鬱の根源とも言える話題を自ら持ち出し、母親に父親の潔白を訴えるジョバンニ。吉本氏は、ジョバンニと母親の会話によつて明らかにされる父親の情報に関して「ジョバンニとその母との会話に浮かびあがつたジョバンニの父は、それほど鮮明な画像をむすんではない。むしろ焦点が合うことが避けられているようにおもえる。」とし、あえてその部分を明瞭に描き出さない事によつて、読者の読みの可能性を広げようという作者の意図があるのでなく、作者である賢治は「ジョバンニの父とはなにか、焦点をむすぶように作品を織りあげていないし、そんな織り方をはじめから意図していない。いわば存在と不在のさまたまな階程が織りあげる意味のドラマをつくっている」と結んでいる。又、吉本氏は「ではなぜ、ジョバンニの父の像について、初期形の作者による設定とちがった推測をいれる余地がうまれたのか」と問い、その理由を「改稿にさいしてジョバンニやジョバンニの父の像を、具象性からできるだけ遠ざけようとし」、「具体的にじつさいの生活を

かんがえてしまうような限定を避けようとしたから」と述べている。^{*4}

「銀河鉄道の夜」では、父親と同様に、ジョバンニの姉も家から離れているという意味では不在である。姉に関する情報は、ジョバンニの留守中に母の元へやってきて、家のあちらこちらをきれいに片付け、トマトで何か作って帰っていった事だけである。姉の不在理由は、出稼ぎに出ている為か、あるいは嫁いでいる為ではないかと思われるが、情報が乏しい為、詳細は分からない。

ジョバンニの家は、父親、母親、姉、ジョバンニの四人家族である。にもかかわらず、父親と姉はいずれも不在とされ、家にはジョバンニと母親しか居ない。もともと四人家族だったものが、不在により二人欠けてしまった為に、ジョバンニの孤独は一層浮き彫りにされた。しかも、どちらも不在の事情の詳細は明らかにされていない。事情が明らかにされない事に関しては、先述の吉本氏の優れた論があるが、それに加え、本来いるはずのものが、その場にいらないという演出により、主人公や登場人物のどこか悲しげで寂しそうな孤独な姿を、より一層くつきりと描き出すことに成功している。

しかし、私がここで強調したいのは、ジョバンニの孤独が一層くつきり描き出されたにも関わらず、第四次稿に

至って、ジョバンニがそのような現実をはっきり受け止め、孤独にも立ち向かっていく程の強さを手に入れたという事である。その強さの根源は、第四次稿のジョバンニが、家族の存在を実感することができるようになったからだと考ええる。

第三次稿までのジョバンニには、家族とふれあう場面は用意されていなかった。それが、第四次稿になると、母親と会話をする場面が用意され、その中でジョバンニは自分の悩みや苦しみを母親に打ち明ける。このことに関しては、後ほど詳しく述べたいと思うが、第三次稿までのジョバンニが、自身の悩みや苦しみを独りの問題として抱えていたのに対し、第四次稿のジョバンニの問題は、家族と共有することの出来るものへと変化していると言える。

独りで問題を抱えることから解放されたジョバンニは、〈この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した大きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持って行くよ〉〈お父さんはほくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかったなあ〉と、今は不在とされる自身の父親との思い出を懸命に母親に語る。

ジョバンニと同じような行動をとる少年が描かれた他の賢治作品に「ボラーノの広場」がある。ファゼーロも、キュー

ストから「お母さんはいまだここにゐるの」と、母親の所在について聞かれると、一言「へい」と悲しそうに答える。しかし、そのあとすぐに「ぼくは小さいときはいつでもいまごろ、野原へ遊びに出た」(するとお母さんが行つておいで、ふくろふにだまされないやうにおしつて云ふんだ)と、母親との想い出を一心にキューストに語り始める。

ジョバンニには父親との《現在》が、ファゼーロには母親との《現在》がないのである。彼らは、《過去》の話でしか父親や母親について語ることができないのだ。そして、その《過去》の話は、いずれも楽しく幸せな想い出である。そのことが、彼らの寂しさを一層確かなものとして浮き彫りにし、その孤独を印象付けている。ジョバンニの姉の不在も、これらと同じ効果をもたらしている。ただし、ジョバンニの姉の不在には、これに貧しい家庭に育つ女性の悲運を彷彿させるような含みも加えられていると言える。

ジョバンニが、ザネリに対し「何だい。ザネリ」と高く叫び返すのは、父親の所在について自ら語つた後である。父親の潔白を信じるジョバンニにとって、父親の噂は耳を覆いたくなる内容だった。ジョバンニのもとへ、父親の所在を明らかにする連絡はきていない。父親の潔白^{※5}を信じるジョバンニの心の中にも、父親が罪を犯し監獄に入れられているかもしれないという《まさかの事実》に対する不安

は少なからずあつたであろう。しかし、父親から何の音沙汰もないことが、父親の潔白を信じる余地をジョバンニに与えてもいる。いわば、そのことがジョバンニにとって、先の見えない不安を緩和させる一筋の光でもあつた。

改稿前は、心の声でしか語られなかった父親の噂を、改稿後のジョバンニは自らの口で語っている。嫌なことから目をそむけず、信じたい我が父の悪い噂を口にするることによつて、自らの殻を破り、現実を受け止め立ち向かつていく。そして、ザネリに言い返す勇気を得るのだ。ジョバンニの父親は不在として描かれ、ジョバンニと直接触れ合う場面は用意されていない。だが、改稿の過程にあらわれた父親の変化は、同時にジョバンニの変化にもつながっている。そういう意味で、第四次稿のジョバンニの父親の不在は、ジョバンニの孤独を浮き彫りにする装置と、子供の成長を促す装置、この二つの役割を果たし、作品の中でうまく機能していると言える。

b ジョバンニの母親

ジョバンニの母親は、過労から来たとされる病で寝たきりである。その事が、ジョバンニの心にある暗闇のひとつになっている。母親が病に倒れるまでの過程に関して、第三次稿では次のように描かれている。

（お母さんは、ほんたうにきのどくだ。毎日あんまり心配して、それでも無理に外へ出て、キャベズの草をとったり燕麦を刈ったりはたらいのたのだ。あの晩、おっかさんは、あんまり動悸がするからジョバンニ、起きてお湯をわかしてお呉れと云ってほくをおこした。おっかさんが、ほんやり辛さうに息をして、唇のいろまで変つてゐたんだ。ほくはたつたひとりと、まるで馬鹿のやうに、火を吹きつけてお湯をわかした。手をあためてあげたり、胸に湿布をしたり、頭を冷したり、いろいろしても、おっかさんはたゞだるさうに、もういゝよといふきりだった。ほくはどんなに、つらかつたかわからない。）

第三次稿「銀河鉄道の夜」

ジョバンニの母親が、病に倒れるまでの過程が詳しく語られているこの部分は、第四次稿になるとすっかり削除される。その代りに、第四次稿では、「家」という章が付け加えられ、第一次稿から第三次稿まで、ジョバンニの口から語られるものとして描かれていた母親が、ここにきてジョバンニの会話の相手として姿をあらわす。母親が、舞台に登場すると、ジョバンニは、母親に甘える子供らしい姿を見せ、心のうちを明かし始める。この事に関しては、

第三章で詳しく述べる事にするが、改稿後も、病に冒されているという設定が引き継がれた母親は、家の（入口の室に白い巾を被つて寝）ている。しかし、第三次稿のように、母親の病に関する詳しい事情が説明されるのではない。

第四次稿で、ジョバンニの口から母親が病氣だという事がはっきりと明かされるのは、「四、ケンタウルス祭」の牛乳屋の場面である。ジョバンニは、家に届かなかった母親の牛乳をもらいに、町はずれの牛乳屋へ向かう。牛乳屋には（どこか工合が悪）そうな（年老った女の人）がいて、ジョバンニは、その人に牛乳が届かなかった事を伝え、牛乳を求めるが（いま誰もゐないでわかりません。あしたにしてお下さい）と言われてしまう。困ったジョバンニは（おっかさんが病氣なんですから今晩でないと困るんです）と、母親の事情を伝え、どうにかして母親の牛乳をもらおうと努める。ここで初めて、母親が病氣だという事が、ジョバンニの口から明かされる。

もちろん、その前の部分、「家」の章にも、ジョバンニの母親が病氣であることを読者に伝える描写はある。アルバイトから戻ったジョバンニは（お母さん、いま帰ったよ）と挨拶をした後、すぐに母親の体調を気につけ、具合はどうかと尋ねる。（白い巾を被つて寝）ているという描写からも、母親が何らかの病に冒されている事は予想できる。

第三次稿「銀河鉄道の夜」

しかし、第三次稿のように、ジョバンニの母親がどのようにして病に冒されたのか、その過程は明らかにされない。その為、第三次稿と同じように過労から来た病なのか、それとも持病なのか心労なのか分からない。又、第三次稿にも関連する疑問だが、母親はいつから寝込んでいるのか、ジョバンニの父親が不在になる前からなのか、それとも後からなのか等、一切分からないのだ。

ジョバンニが、母親に牛乳を届けるという設定は、第一次稿から第四次稿まで変わらずに引き継がれているものである。牛乳を届ける対象である《ジョバンニの母親＝病氣》という設定が、特に色濃く取り上げられているのは、第三次稿と第四次稿である。第三次稿のジョバンニは、心の声で過去と現在の自分について次のように語っている。

（あゝ、もしぼくがいまのやうに、朝暗いうちから二時間も新聞を折ってまはしにあるいたり、学校から帰ってからまで、活版処へ行つて活字をひろつたりしないでもいいやうなら、学校でも前のやうにもつとおもしろくて、人馬だつて球投げだつて、誰にも負けないうで、一生けん命やれたんだ。それがもういまは、誰もぼくとはあそばない。ぼくはたったひとりになつてしまつた。）

描かれ方に多少の変化はみられるが、第四次稿になつても、引き続きジョバンニは朝は新聞配達をし、学校が終わると活版所でアルバイトをしている。そして、過去と現在の自分を比べて「あのころはよかったなあ」と、過去を懐かしく思っている。

それをカムパネラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このころぼくが、朝にも午後も仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネラともあんまり物を云はないやうになつたので、カムパネラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかったのだ、

第四次稿「銀河鉄道の夜」

「あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネラのうちに寄つた。カムパネラのうちにはアルコールラムプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせると円くなつてそれに電柱や信号標もついてゐて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるやうになつてゐたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすつ

かり煤けたよ」(中略)／「いまま毎朝新聞をまはしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしてあるからな。」

三、家 第四次稿「銀河鉄道の夜」

〈このごろ〉という少し前の過去をあらわす語や、〈学校でもまへのやうに〉とか〈学校から帰る途中〉等、就学する年齢が定められた〈学校〉という場が示されている事等から考えると、ジョバンニの過去の話は、それほど昔の話ではないように思う。そして、ジョバンニがアルバイトをはじめた時期や学校で楽しく遊べなくなった時期というのも、ジョバンニの母親が病氣になった時期や、ジョバンニの父親が帰宅しない、あるいはできない時期と関連があることも否めない。

ジョバンニは、ザネリをはじめ同級生達から「お父さんから、らっこの上着が来るよ」と、しきりに愚弄される。詳しい事情は明かされていないが、ジョバンニの父親は、次に帰る時、「らっこの上着」をジョバンニに持ち帰ると約束しているらしい。しかし、その父親は中々家に帰らず、ジョバンニには何の便りもない。おまけに監獄へ入っているという噂まで立っている。この父親の不在が、ジョバンニ家の貧しさに拍車を掛けている可能性も否めない。

与えられた描写を糸口に、あらためてジョバンニの母親の病について考えてみると、おそらくは、ジョバンニの父親が不在になった後、主の留守を守るものとして必死に働き、知らず知らずのうちに心身共に疲労を蓄積させ、その結果倒れてしまったのではないかと考える。そして、母親が倒れた事をきっかけに、ジョバンニはアルバイトを始めた。その時期は、ジョバンニの父親が不在のままであるという深い事情も大きく影響していると言えるだろう。

第三次稿にあった、母親が病氣になるまでの過程を説明したジョバンニの独白が、第四次稿になると削除された事に関して、入沢氏と天沢氏は、家の章が加わった事により、必要がなくなった為削除されたと述べている。^{※6}

では、ジョバンニの独白と引き換えに誕生した「家」という章は、作品や登場人物たちをどのように動かし彼らに変化を与えたのだろうか。これについては、後ほど詳しく述べたいと思う。

二、現実世界へ引き戻す装置としての母親 — ジョバンニの母親の場合 —

a 牛乳

ジョバンニが、銀河の旅へ入り込むきっかけを作ったの

は、母親の牛乳である。^{*7} 第四次稿では、家に届かなかった母親の牛乳を取りに、ジョバンニは牛乳屋を訪ねるが、店にいた〈年老った女の人〉から〈誰もゐないのでわかりません〉〈もう少したってから来てください〉と言われ、仕方なく店を後にする。第三次稿では、これとは違った描かれ方がなされている。

その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立つて、ジョバンニは帽子をぬいで「今晩は、」と云ひましたら、家の中はしんとして誰も居たやうではありませんでした。／「今晩は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立つてまた叫びました。するとしばらくたってから、年老った下女が、横の方からバケツをさげて出て来て云ひました。／「今晩だめですよ。誰も居ませんよ。」／「あの、今日、牛乳が僕んところへ来なかったの、貰ひにさがったんです。」ジョバンニが一生けん命勢いよく云ひました。／「ち、今日はもうありませんよ。あしたにして下さい。」／下女は着物のふちで赤い眼の下のところを擦りながら、しげしげジョバンニを見て云ひました。／「おっかさんが病氣なんですがないんでせうか。」／「ありませんよ。お気の毒ですけど。」下女はもう行つて

しまひさうでした。／「さうですか。ではありがたう。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ましたけれども、なぜか泪がいっぱいに湧きました。

第三次稿「銀河鉄道の夜」

第三次稿のジョバンニは、〈年老った下女〉からぞんざいな扱いをされ、牛乳を受け取れないまま泣く泣く店を後にする。第四次稿のジョバンニも、牛乳を受け取る事は出来ないが、〈もう少したってから〉行けば貰えるかもしれないという希望があり、同じ受け取れないという状況ではあるが、その事情は大きく異なる。

牛乳が受け取れないと分かった第三次稿のジョバンニは、涙を流し、自分の身の上を悔しく思い、裕福な家庭に生まれたカムパネルラへの羨望を心の中でつぶやく。そして〈早くは早く帰って、牛乳はないけれども、おっかさんの顔にキスをして、あの時計屋のふくろふの飾りのことをお話しやう〉と、母親の牛乳を諦める。しかし、改稿後のジョバンニは、涙を流すことも、貧しさを悔いることも、カンパネルラへの羨望を語ることも、そして母親の牛乳をあきらめることもしない。

列車の中で、思いがけずカンパネルラと遭遇したジョバンニは〈みんなはねずぬぶん走ったけれども遅れてしまっ

たよ。ザネリもね、ずゐるぶん走ったけれども追いつかなかった[※]」というカムパネルラの言葉を聞くと、「さうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出掛けただ」と、実際はザネリや同級生達から「らっこの上着が来るよ」と嘲られ、仲間などに入れてもらえていなかったはずなのに、最初からカムパネルラと一緒にここへ出掛けてきたのだと思ひ込んでしまう。ジョバンニは、ザネリたちをどこかで待っていてようと提案するが、カムパネルラはどこか苦しそうな少し青ざめた表情を浮かべ「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎ひにきたんだ」と返す。そんなカムパネルラの様子を見たジョバンニは「なんだかどこかに、何か忘れたものがあるといふやうな、おかしい気持ち」になる。この「おかしい気持ち」の根源が何なのか分からないジョバンニは、心の中がモヤモヤして黙り込んでしまう。

第三次稿のジョバンニは、同様の場面で「何か忘れたか済まないことがしてあるといふやうな、おかしい気持ち」を浮かべている。改稿によって、「済まないことがしてある」が、削除されたのだ。この「済まないこと」というのは、母親の牛乳を持って帰れないことに対するもの、すなわち、母親に向けられているものである。改稿前のジョバンニは、自分自身や自分の家族に対し、後ろ向きな姿勢が多く見られるが、改稿後のジョバンニは、内に秘めた悲し

みや苦しみに変わりはないものの、それを補う位の前向きな姿勢が見られる。ジョバンニを前向きにさせた要因の一つに、牛乳が受け取れるか、受け取れないかの問題があげられる。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」／いきなり、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで云ひました。／ジョバンニは、／（あゝ、さうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い一つのちりのやうに見える橙いろの三角標のあたりにゐらっしゃって、いまぼくのことを考へてゐるんだった。）と思ひながら、ぼんやりしてだまってゐました。

第三次稿および第四次稿「銀河鉄道の夜」

カムパネルラの「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」という言葉を受け、ジョバンニは「あゝ、さうだ」と、こゝでようやくぼんやりとした記憶ではなく、はっきりと現実世界に残してきた母親の存在を思い出す。ジョバンニが、銀河の旅の中で常に心の中に持ち続けている「何か忘れたものがある」というぼんやりとした記憶は、母親の牛乳にはじまり、母親の忘れられた牛乳を取りに行かな

ければならない事、それを母親の元へ届けなければならぬ事、そして、〈一時間半で帰ってくる〉と約束した母親のいる家へ帰らなければならぬ事へと繋がっている。この母親の牛乳、すなわち、母親の存在が、ジョバンニの忘れ物であり、ジョバンニと現実世界を繋ぎとめる要となっている。又、第三次稿のジョバンニが母親の牛乳を諦めるのに対し、母親の牛乳を諦めない第四次稿のジョバンニからは、家を留守にしている父親に代わって家を守り、病気の母親を助ける長男としての意識が見受けられると言える。

b 星座早見

ジョバンニは、カムパネルラが持っている〈円い板のやうになった地図〉を見て、〈なんだかその地図をどこかで見たやうだ〉と、モヤモヤした気持ちをさらに募らせる。このぼんやりとした記憶が、ジョバンニと現実世界を繋ぎとめる命綱の働きをしているわけだが、現実世界にいる時、ジョバンニはカムパネルラが持っている〈円い板のやうになった地図〉と同じものと思われるものを目に見ている。

時計屋の店には明るくネオン燈がついて、(中略)
そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの

葉で飾ってありました。／ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。(中略)／あ、ほくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立つて居ました。／それから俄かにお母さんの牛乳のことを思ひだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

第四次稿「銀河鉄道の夜」

時計屋にかけられた星座早見を見つける前、ジョバンニはザネリから〈らっこの上着が来るよ〉と愚弄されている。町は銀河の祭りに湧きたち、人々は今日という特別な日を祝い、楽しみ、笑い合い、幸せに満ち溢れている。そんな日に、ザネリの心無い一言を受けたジョバンニの小さな胸は〈ぱっと〉〈つめたくなり〉悲鳴をあげる。〈きうくつな上着〉が、さらにジョバンニを沈鬱にさせた。そんな時に出会ったのが星座早見である。

ジョバンニは〈円い黒い星座早見〉を見ながら、そこに描かれた世界の中を〈どこまでも歩いて見たい〉という思いに駆り立てられる。この思いは、現実世界での苦しみや悲しみ、辛さから逃れたいという逃避願望から生じたもの

である。ジョバンニは、まるで吸い寄せられるかのように〈われを忘れて、その星座の図に見入〉っていく。この吸引力を持つ星座早見は、いわばジョバンニを異世界へと招きよせる為の小道具として存在している。だが、ここでジョバンニは〈俄かにお母さんの牛乳のことを思ひだし〉我に返る。母親の存在が、星座早見の吸引力に勝ったのである。この母親の牛乳の存在は、改稿前はまだこの場面にはなかった。

時計屋の店には明るくネオン燈がついて、(中略) そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。／(あ、もしぼくがいまのやうに、朝暗いうちから二時間も新聞を折ってまはしにあるいたり、学校から帰ってからまで、活版処へ行って活字をひろったりしないでもいいやうなら、学校でも前のやうにもっとおもしろくて、人馬だつて球投げだつて、誰にも負けないで、一生けん命やれたんだ。それがもういまは、誰もぼくとはあそびえない。ぼくはたったひとりになってしまった。)／ジョバンニはきうくつな上着の肩を気にしながら、それでも胸を張って大きく手を振って、町を通って行きました。

第三次稿「銀河鉄道の夜」

第一章でも少し触れた部分だが、改稿前、ジョバンニの心の声は、ジョバンニの現実的な悩みをあらさまに曝け出し、実際の生活を垣間見せるような仕上がりとなっていた。しかし、このジョバンニの心の声は、改稿後すべて消し去られ、まるで星座早見の吸引力に吸い寄せられているかのような〈あ、ぼくはその中をどこまでも歩いて見たい〉という逃避願望へと生まれ変わった。星座早見の吸引力は、改稿後いっそう強められ、改稿後のジョバンニは、改稿前よりも、この時点ですでに幾分異世界へと向かっているようである。星座早見の吸引力がまだ弱かった第三次稿のジョバンニには、〈俄かにお母さんの牛乳〉を思い出すことは、必要がなかったのだ。

ジョバンニの忘れ物は、現実世界にある牛乳や星座早見等という単なる物ではない。それらをもとに手繰り寄せられる母親の記憶であり、母親の存在である。列車の中でジョバンニが目にした星座早見は、それ自体が現実世界とジョバンニを結んでいるのではなく、星座早見の裏側にある母親の記憶とジョバンニを結んでいるのだ。星座早見は、母親の存在をジョバンニに想起させるきっかけにすぎない。

改稿前も改稿後も、いずれも、母親の存在によって、ジョバンニは現実世界と繋がっている。しかし、母親が我が子を現実世界へと引き戻す力は、改稿前よりも改稿後の方が、

より一層強められたようである。改稿前にはなかった星座早見前でジョバンニの牛乳の想起が、それを物語っている。母親の存在は、ジョバンニを現実世界へ引き戻す装置となっていると言える。

三、ジョバンニとその家族

―改稿に伴うジョバンニの変化―

「家」の章について改めて考えてみたいと思う。「銀河鉄道の夜」には、さまざまなテーマが盛り込まれているが、その中の一つに「家族」がある。作品に登場するおもな家族は、ジョバンニ家、カンパネルラ家、かおる家、この三家族である。冒頭部分でも少しふれたが、この三家族の家族構成は、改稿されることに、少しずつ変化している。第四次稿になるまで、カンパネルラの父親やジョバンニの姉の存在は描かれておらず、かおるやただしの姉弟構成もさまざまな推敲がなされていた。カンパネルラやかおる達の家族に関しては、改めて論じる事として、本稿ではジョバンニの家族にしばって考える事にする。

ジョバンニの家族の描かれ方の変化は、ジョバンニの心の描かれ方の変化と呼応し、作品全体を大きく動かしている。改稿による大きな変化の一つは、ジョバンニと家族の

関わり方である。中でも、母親の存在は大きな意味を持っている。

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」
ジョバンニは靴をぬぎながら云ひました。／「あ、ジョバンニ、お仕事がひどかったらう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がい、よ。」／ジョバンニは玄関を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被って寝んでゐたのでした。ジョバンニは窓をあけました。／「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげやうと思つて。」／「あ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」／「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」／「あ、三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」／「お母さんの牛乳は来てゐないんだらうか。」／「来なかったらうかねえ。」／「ぼく行つてとつて来やう。」／「あ、あたしはゆつくりでいゝんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」／「ではぼくたべやう。」

三、家 第四次稿「銀河鉄道の夜」

「家」の章は、ジョバンニとジョバンニの母親の会話がメインとなっている。[※]それまでは、ジョバンニの心の声によって語られるだけの存在だった母親が、第四次稿では、声を得て堂々と舞台上に登場する。改稿前のジョバンニに、家族とふれあう場面は用意されていなかった。それが、第四次稿になると母親との会話の場面が用意される。しかも、その会話から浮かび上がってくるのは、不在とされる父親と姉の姿であり、この章の話題の大半は、家族に関することである。

改稿前にあったような、貧しさや悲惨な様を明かすジョバンニの独白はすべて削除されたが、だからといって第四次稿のジョバンニ家が貧しさから解放されたわけでもないし、母親が病気であることや父親が不在であることも変わらずに引き継がれている。しかし、改稿前と大きく異なるのは、ジョバンニの独白が、独白ではなくなり、自らの口で母親に打ち明けていることだ。それまで、ジョバンニが独りで抱えていた問題は、家族を実感する事に呼応して、家族で共有するものになった。

アルバイトを終え、家に帰ったジョバンニは、（お母さん。姉さんはいつ帰ったの）と尋ねる。姉が家に来ることをジョバンニは知っていたようだ。姉は、ジョバンニ達の為にトマトで何かを作ってくれている。ジョバンニは、それを母

親から先に食べるよう勧められ（むしゃむしゃ）食べ始める。第三次稿まではなかった、母親の愛情と姉の手助けを受けるジョバンニの姿が、読者に示された。

また、ジョバンニは、姉の料理を食べながら、自分の胸のうちを母親に語っている。第三次稿では、心の声でしか語る事の出来なかった父親の話題を、（ねえお母さん、ぼくお父さんはきつと間もなく帰ってくると思ふ）と、自ら取り上げ語り始める。これを聞いた母親は（お父さんはこの次おまへにラッコの上着をもつてくるといったねえ）と、ジョバンニにとつてタブーである話題を投げかける。それを聞いたジョバンニは、ザネリ達同級生から冷やかされている事、そしてカムパネルラだけは（気の毒さう）な表情を浮かべ何もしない事を母親に打ち明ける。それを聞いた母親は、ジョバンニの父親とカムパネルラの父親が昔からの友人である事をジョバンニに話し、話題を変える。

人は、声に出してみる事、言葉にして誰かに聞いてもらう事によって、心が楽になることがある。母親という会話の相手ができたジョバンニは、心の中にある苦悩の根源を、声を使って吐き出す事ができるようになり、それによって、改稿前のジョバンニよりも心にゆとりができ、穏やかな少年の一面も見せている。父親と一緒に、カムパネルラの家へ遊びに行った時の事や、カムパネルラと遊んでいた頃の

話等を、一生懸命話すジョバンニからは、年相応のあどけなさを感じるし、「家」の章に浮かび上がるジョバンニは、母親に甘える子供らしい姿である。

改稿によって付け加えられた「家」の章には、ジョバンニの姉が投入され、四人家族という構図が出来上がった。不在とされる父親と姉は、舞台上に姿をあらわすことはないが、ジョバンニと母親の間で交わされる話の中には、父親も姉も登場し、会話という舞台の上では、ジョバンニの家族、すべてが登場している。改稿前のジョバンニには、家族とのふれあいの場は用意されていなかった。話を聞いてくれる母親、手助けをしてくれる姉、そして至宝の思いを沢山与えてくれた父親。家族という支えを得たジョバンニには、もう卑屈な独白など必要がなかったのだ。ジョバンニの問題は、家族全員が共有する問題へと変わり、そのことが、ジョバンニの勇氣や強さへとつながっていったとされていると言える。

おわりに

吉本氏は、「銀河鉄道の夜」とジョバンニの父親について「この作品を、言葉の表面とその裏側とか、作品の言葉とそれを紡ぎあげている作者とか、そういったふうにな

いで、作者さえも包み込んだ厚みのある合板のようにみなせば、どこかでとても適切な順列組合せに遭遇したとき、ジョバンニの父の姿を十字路に見つけることができるのかもしれない。」と述べている。今回、論者は、作品全体を見渡しなが^{*10}ら、どこかにあるであろう「とても適切な順列組合せに遭遇」する事を期待し、その「遭遇」によって明らかになるジョバンニの父親や母親、姉、そしてジョバンニの新しい一面を見つけ出す事を試みた。その結果、改稿の過程により浮かび上がった、ジョバンニとその家族の深いかかり合いの一端と「遭遇」することが出来た。

ジョバンニの家族は、不在とされる父親と姉、そして第四次稿では、舞台上に姿をあらわす母親も、すべて鮮明な描かれ方はされておらず、ジョバンニ家の情報は、ジョバンニの独白から、その内情を覗き見るしかできなかった。その乏しい情報も、改稿を重ねるごとに削除され、どんどん薄められていった。しかし、父親、母親、姉、この三人の存在は、薄められれば薄められるほど、ジョバンニの心を大きく動かしたり、作品全体の雰囲気を変えたり、重要な役を担いはじめる。

「銀河鉄道の夜」に流れる寂しさや苦しみ、そして孤独は、改稿前も改稿後も途絶えることなく流れ続けている。しかし、改稿の過程により描きあげられたジョバンニには、う

ちに秘めた悲しみや苦しみを補う位の前向きな姿勢が見られる。これは、作者が意図的に成長させたもののなのか否、確かな事は分からないが、ジョバンニの心の変化は、家族と深い関わりがあることは確かである。

注

- 1 「銀河鉄道の夜」を、ジョバンニの成長物語として捉える西田良子氏（『宮沢賢治論』桜楓社 昭和五十六年）や多田幸正氏（『賢治童話の方法』勉誠社 平成八年九月）の考えに対し、内田寛氏は、「十歳やそこらの少年ジョバンニが、「無上道」や「菩薩的解脱」あるいは「求道者」といった高度な宗教的理念を表わすこととは結び付けられて論じられること」に対し異議を唱え、この作品を「普通の少年の普通の成長を読み取るべきだ」（『銀河鉄道の夜』論―成長無物語としての構造―）「日本文学誌要」法政大学 平成十三年三月）と述べている。他にも、改稿に伴うジョバンニの孤独や心の変化、そして作品のテーマの変化については、ブルカニロ博士が削除された問題等と関連づけながら、安藤元雄氏（『銀河鉄道の夜』―牛乳と星と―）「国文学 解釈と教材の研究」学燈社 昭和五十年四月）や、小沢俊郎氏（『銀河鉄道の夜』の世界 『小沢俊郎・宮沢賢治論集』有精堂 昭和

六十二年三月）等によって論究されている。

- 2 萬田務氏は、ジョバンニがザネリのことを「ばかだから」と思う事に関して「決して「ザネリがばか」でもないし、また「ばかだから」言ったのでもない」と述べ、なぜ、ザネリは「ジョバンニにそのような悪口を浴びせかける存在として設定されているのか」と問い、ジョバンニとザネリ、そしてカムパネルラ、この三人の関わり合いの「矛盾や不自然さ」に触れながら、ジョバンニの孤独について述べている（『銀河鉄道の夜』攷 主人公の孤独をめぐって）大阪城南女子短期大学 昭和四十二年六月）。
- 3 吉本隆明「父のいない物語・妻のいる物語」『宮沢賢治』筑摩書房 平成元年七月
- 4 前掲書 注3
- 5 吉本氏は、ジョバンニの母親は、父親の所在について何か知っているようであると述べている（前掲書 注3）。
- 6 入沢康夫・天沢退二郎「討議『銀河鉄道の夜』とは何か」青土社 昭和五一年六月
- 7 天沢退二郎氏は、ジョバンニと牛乳の関係について「（乳）というモチーフは『銀河鉄道の夜』という作品のライトモチーフであり、もしジョバンニの母親のもとに「牛乳が配達されなかったという偶然事（？）」がなかったとしたら、ジョバンニが銀河鉄道の夢を見ることもなかっ

* 宮沢賢治作品の引用は、すべて『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房）に拠る。

（たじま あやか・実践女子大学大学院博士後期課程）

8 たかかもしれない」、「牛乳というモチーフの役割は、一方で水死のモチーフと表裏をなしながら『銀河鉄道の夜』の作品行為の置かれた主題を指示している」（なぜ〈カムパネルラの死に遭ふ〉か」前掲書 注6）と述べている。第三次稿では、『ザネリはね、ずるぶん走ったけれども、乗り遅れたよ』と、ザネリについてしか触れていないが、第四次稿になると『みんな』と『ザネリ』について触れるようになる。この変化は興味深い。

9 栗原敦氏は、「ザネリのはやし」ことばによるいじめにあったとき、ジョバンニが内心反芻していた父の無実の説明や病氣と困窮の中にいる母への同情は、「最終形」では、母とジョバンニが交わす会話のことばの中に表れるように変えられて、「家」というひとつの独立した現実的場面を形成している。母と子が互いを思いやりながら、同じ現実に向き合っている姿は、ジョバンニの孤立感や寂しき、困窮に陥った引け目や嘆き、つらさの表現の多い「三」との大きな違いだろう」（『銀河鉄道の夜』『知っ得宮沢賢治の全童話を読む』學燈社 平成二十年三月）と述べている。

10 吉本隆明「ジョバンニの父とはなにか」『梅光女学院大学公開講座論集』昭和五十八年六月